救助も火災も消防団の力で

福島県相馬市消防団
第３分団　分団長　**立谷　耕一**（62歳）
消防団歴　41年（自営業）

相馬市の概要と被害状況

相馬市は、福島県の東北端に位置し、西は伊達市、南は飯舘村と南相馬市、北は新地町と宮城県に隣接する。東西28㎞、南北13㎞に及ぶ市の総面積は197.67㎢、人口は３万6,768人、世帯数は１万3,715世帯（平成24年３月１日現在）である。平坦地と山間部が半々の地形で、西には阿武隈山地が連なり、東は太平洋に面し、市街地は中央の平坦地に位置する。相馬中核工業団地は、相馬市と隣接する新地町にまたがる臨海型の東地区（相馬港に隣接）と内陸型の西地区からなり、相馬共同火力発電株式会社新地発電所等15社が操業している。

相馬市消防団は10分団あり、団員554名のうち10名が亡くなった。最も犠牲者が多かったのが第９分団で、分団長、副分団長も、住民に避難の呼びかけを行っている最中に死亡した。

東日本大震災では、相馬市中村で震度６弱を観測した。人的被害は死者458人、重傷者11人、住家被害は全壊1,001棟、半壊766棟が発生している。

地域活動と消防団

大学を出て、地元に帰って来てから、消防と青年会と青年会議所をずっとやってきて、衣料品の小売り業と、平成７年から平成23年11月まで市議会議員を続けた。市長は従兄弟にあたる。

平成23年２月のチリ地震津波の時は、携帯電話に指示が来て、港湾事務所に潮位計で水位を確認して、消防署に報告した。あの時は港の潮の出入りや、潮が上がったり下がったりというのは顕著に見えたが、港から上に溢れ、住宅地に流れ込むことはなかった。今回は港湾事務所も全部流された。あそこにいつまでもいたら当然やられていた。前々日の９日に地震が起きた時は、港まで行って３時間くらい潮位を確認して報告した。

昭和35年のチリ地震津波時の方がすごかった。沖の堤防をワーッと越えて津波が来たが、潮が海底まで今まで見たことのないところまで引いた後、グオーッと戻って来た。沖合の防波堤は越えてきたが、沿岸の波返しは越えては来なかった。私の記憶にあるのはこれが最大で、家まで流されたというのはこの辺ではなく、言い伝えもそれくらいであまりない。

第３分団は定員が48名で、あの日も30名くらい集まってくれた。30～40歳代が多く、３班には若い人もいる。第３分団は４班に分かれており、１班：原釜地区、２班：尾浜地区、３班：松川地区、４班：細田地区で、４班は内陸にある。

津波広報と車を避難誘導

地震が起きた時は松川地区の民家にいた。未だかつてない大きな揺れで時間も長く、相当な被害ではないかと思ったが、自宅のある原釜まで車で戻ったら、建物自体はしっかりしていた。自宅の中は、家具などが倒れ、物が散乱している中で、お袋が片づけをしていたが、相馬市も家屋倒壊は少ないのではないかと、最初はそんなに深刻に考えず、津波の感覚はそんなになかった。

そのうち、味噌・醤油の醸造をやっている市長の実家の味噌蔵が潰れたというのを聞き、お見舞と消防団の出動で、消防法被を着て帽子をかぶって出た。原釜周辺で地震で潰れたのは相当古いその蔵くらいで、そこで市長の弟夫妻と話をしていたら、津波が来るという話になった。

震災時の手順では、広報を一番にやることになっており、屯所まで走って行った。班長にポンプ車を運転させて、「避難してください」と広報して回った。地区内全部を回ろうと、火災予防のルートで回った。海側の危険なルートもあり、曲がろうとバックミラーを見たら津波を見たので、曲がらずそのまま真っ直ぐ西の高台の方に逃げた。多分、これが第１波だったと思う。高台に向かっている途中でも対向車が来るので、それを全部「津波が来ているから」と止めてＵターンさせ、上の道路に向かわせた。私らはポンプ車１台で回っていたが、松川地区は私らより先に広報が始まっていたし、津波の広報で助かっている人も結構いる。この時点では、火災が発生するとは思っていなかった。

生きている人を助け、死んでいる人を安置した救助活動

高台にある屯所に戻ると、屯所の近くまで水が上がっていて、津波が寄せた瓦礫とか車も人も流されてきていた。津波でやられた所に戻ったので、そこからもう、目の前にあることから活動が始まった。その時はまだ、集まってきた団員は10名ほどだったので、手分けして車で流された人を救助したり、車の中や瓦礫の中から助けられる人は助け、亡くなっている人は遺体を出して運んだ。ずぶぬれになり立ち上がれなかった女の人は、畳を敷いて道を作り、３名で両側から抱えて避難させた。デイサービスの車が流されて、４人くらいいたうち１人だけ助かった。高台にある家で、津波で浸水しても残った家が、近くの人の避難先となり、私は助けた１人を連れて行った。

すでに亡くなっていた人は、また津波が来て流されては大変なので放っておけず、屯所の２階に敷いていたゴザをはがして、１階のポンプ車を出した後に敷き、何体か安置した。亡くなった人を安置する場所だけを決めて、団員がそれぞれ手分けしてやった。毛布などを近くの家からもらったり、瓦礫と一緒に流れてきた毛布で運んだようだ。

原釜地区では避難訓練を何回かやっていて、東部公民館が避難所と知っているので、歩ける人は自主的にそちらに向かったようだ。お袋も屯所の近くで見たので、お袋も助かったなと思った。後でお袋から、俺が「何も言わないで出て行った」と言われた。その時は津波が来ると思わず、出て行ったから。でも、消防本部でも連絡を取り合っていたのに、お袋が避難先で安否をきちんと伝えなかったためか、数日間、私は行方不明者名簿に載っていた。

おまけに火事が発生！

そのうち夕方５時頃、近くで「火事だ！」と聞いた。津波後の火災だから、全くそこは孤立していて、水道が止まって消火栓が使えなかった。防火水槽がある所はわかっていたので、そこから水をとって最初は１台でやっていたがとても間に合わず、松川地区（３班）のポンプ車と２台で防火水槽から吸管を入れて放水した。消防本部や市に要請しても来れないと思うから、要請は全然せず、集まった団員だけで消さなくてはならない。

さらに、無事だった細田地区が後で何名かポンプ車できて最終的には３台、団員が15名～16名は集まってホースを出し、手伝ってもらいながら、ほとんど分団だけで消火した。最終的に集まってくれた団員は30名ちょっとだった。

火事の原因は、津波で流されてきた瓦礫が崖で止まり、流されてきた車などに油か何かが引火して燃え上がったのではないか。瓦礫の隣の家が燃えて、崖の上の家まで燃え移り、それを消さなければ、残っている家がみんなやられてしまう。だから、助けた人もそのままにして消火に向かった。

防火水槽と出火場所が100m ～130m離れていて、最初はなかなか水が出なかったり、ポンプ車の具合も悪かったので、吸管を入れ直して２台をつなぎ、両側に引火しないようホースを分けて必死で消火作業にあたった。消火というより防ぎょという感じだった。防火水槽は４ｔ半くらいで、ちょうど消す分だけの水量があり、全焼１軒だけで何とか消せた。両側に２軒あったが、手前に道路が１本あり、海からの西風がなくなり風向きが変わったので、さほど西側に燃え移らなかった。燃えた家は全焼で、地震で残ったのに火災で焼けてしまった。隣家では津波で流された瓦礫だけが燃え、倉庫と作業小屋、近くの駐車場にあった車10台くらいも燃えたが、母屋までは燃えなかった。ほぼ消火し終わったのが夜９時頃、発生してから４時間くらいで鎮火できたのは幸いだった。

火を消しながら見渡せる範囲を見たら、今回の震災で火事になったのは唯一そこだけだった。

もうひとつ残っていた救助の大仕事

火事を消して戻ると、１人屋根の上に残っている人が助けを求めていると連絡が来た。何とかして助けてほしいというので現場に行ってみると、車のライトで照らされた中、家ごと流された屋根の上に取り残された人がいたが、周りは水が深く、寒くて瓦礫の中を入っていけない。「船がなくちゃだめだ」と言ったら、近くにいた人が渡し用の釣船のような小さい船を軽トラックの上にかぶせて持ってきた。ポンプ車を構えて、民間の人がライトを照らし、瓦礫を集めて火を燃やした。団員３名を船に乗せ、流されてきたロープを命綱のように船に縛って引っ張れるようにして、声のする方に向かわせた。救助に向かった団員は30歳代の建具屋と船具屋で、助けなくてはという一心で、声のする方に、瓦礫をかき分けて、片道１時間半くらいかけて行った。屋根の上から救助すると、「おじいさんたちもいるはずだ」と言うが、１階にいたおじいさんたちは亡くなり、どこかで助かっていたお母さんとその方の２人しか残らなかった。その周りでは、あとは皆水没した。

救助活動の現場を見ている人は結構多く、津波が起きた午後４時頃から私らが助けに入った午後10時過ぎくらいの間そこにいて、あとは消防団が頼られた。救助してもらった人は、すぐ公立病院にポンプ車で運び、消防法被を着せ、毛布をかぶせてお願いしてきた。終わったのは夜中の12時頃になっていた。水害の経験はあり土嚢積みはやっているが、こういうボートで救出に行くことはなかった。

町の中は電気も水道も大丈夫だったので、家がなくなった住民は、向陽中学校や市内に作った各避難所に分散して入り、団員も家族のいる所に避難した。３月14日までは団員もある程度の人数がいたが、15日くらいからは５名～６名になった。

震災の翌日からの避難誘導、捜索活動

翌12日は、朝から消防団本部の指示で、細田地区に孤立していた老人会の人たちなど50人ほどの救助に回り、30名くらいの団員で運び出し、歩けない人は軽トラックに乗せ、待機していた救急車で１日がかりでピストン輸送をした。３日目も、緊急消防援助隊、自衛隊、警察と一緒に、家に残っている人の避難誘導をし、瓦礫の撤去や捜索活動にはまだ入っていなかった。津波警報や福島原発放射能の影響もあり、捜索を展開中に避難指示があって、自衛隊と団員が一緒に避難した。

捜索・遺体搬送は５月８日まで、４名で東部公民館に現地本部（事務局）を置き対応した。前日に作戦を立てて工程表を作り、毎朝８時半過ぎに出動できる人が集まり、消防団、緊急消防援助隊、自衛隊、警察が集まり、９時からその日の打合せをして分担を決めた。消防団がついて回るが、土日は団員が10名くらい集まった。最初の頃は、瓦礫の上を歩いて目視し、原釜地区では、最初は何体もの遺体を見つけた。顔を見て、身元確認をしなくてはならない。残っている人や渡航先なども確認したが、見たことがない人もいた。遺体が見つかると、消防→対策本部→警察という順で連絡して確認するが、現場にいる警察に直接伝えることもあった。原釜地区では、後で市役所の行方不明者名簿ができ、消防にも要請がきて、すでに避難していた人を確認したりして100人の名簿を70人ほどに減らした。

消防団の活動は５月21日頃までで、４名で泊まり込んでいた公民館を引き払った。早い人は仮設住宅に落ち着くことができ、公民館も６月から活動再開するということだった。

４月に入ってから、東部公民館の近くのアパートにお袋と息子は入居した。家内は震災の時、北海道の札幌の娘の所にいて、メールで連絡がきていたので、消息がとれた。息子２人のうち１人は今一緒にいる。商売の衣料品店の店舗は流され、道路をふさいだので、すぐ取り壊しになり、４月20日にプレハブの仮店舗を前の場所に建て、入学式に間に合わせた。震災から何日か後に市議会も災害対策本部を作ったので、毎朝のように集まり、今も市議会につめて災害対策を検討している。５月以降、告別式が続き、８月に入ってからは毎日のように告別式が続いている。何せ、約450人の人が亡くなったのだから。

消防団活動からの教訓

消防団は、沿岸にある１、２、３班の被害が大きかった。私の原釜班は団員15名のうち家が残ったのは１軒だけで、うちも含めて14軒は流失した。尾浜班は９名いるが、屯所ごとポンプ車が流され残ったのは１軒で、８軒が流失した。松川地区は12名いるが、被害を受けなかった人はいない。テレビで見た松川浦の津波の映像はすごかったが、松川地区は被害映像が出た所に住んでいる人がほとんどなので、８名～９名は家屋被害が出た。うちの第３分団では１名が犠牲になった。家を出て、ポンプ車を置いてある屯所に行く途中で津波に飲まれたらしい。

相馬港を襲った津波と火災

従来の潮位観測などを港付近でやってたら津波に飲み込まれる可能性が高いので、はっきりした津波の情報などを、早目に出してもらいたい。今度、津波の情報も一番高いのを予想して出すようにしたというが、そういう体制が前からできていれば、ある程度助かった人も多かったのではないかという気がする。避難を呼びかけても、亡くなった人の大部分は逃げなかった人とたまたま戻った人で、避難しなかった人の方が多いのではないか。

団員の装備については、瓦礫で救助するとき、釘を踏み抜いて怪我をした人がいた。消防の靴であれば大丈夫だが、瓦礫の上を３日ほど歩くと壊れる。備蓄または補給してくれればうれしい。手袋、マスクはあった。消防法被があれば、寒さよけなどにもなる。

想定外の災害では人力で立ち向かうのは酷だが、その場でやれることをする。消防団は仕事を抱えながらやる。消防団としての使命感でやるものもあるが、ポンプ操法の中で使命感も育ってきており、誰もが発憤するのではないか。的確な対応をしていれば消防団を続けてくれるのではないだろうか。

女房と助けた人の生命

福島県相馬市消防団
第７分団　分団長　**桑折　健一**（56歳）
消防団歴　23年（農業）

消防団活動と津波警戒

私は生まれた時からここに住んでいる。消防団には昭和63年、31、32歳で入団した。農業で米を作っているが、田の95％が浸水してしまったので、今年は作付けはしていない。住まいは相馬市柏崎で、半壊したが自宅は大丈夫だった。

相馬市の津波ハザードマップには、低い所が少し浸水するとしか載っておらず、リアス式のところなら来るかもしれないが、こんな平らな相馬には10mを超える津波が来るとは思っていなかった。

平成22年のチリ地震津波の時は、50cmぐらい潮位変化があり、広報した。潮位観測の担当ではないが、異常があれば連絡することになっていて、危ないので海のすぐ脇には行かないが、橋の上からなどある程度近くまで行って見る。３月11日の震災当日も、これより少し大きいぐらいのが来るかと思った。震災前にも何回か大きい地震が来ていたので、「またか」と思って、津波に対しては何もしなかった。

黄色い煙の火事かと間違えた大津波

３月11日午後は、自宅の外の庭にいた。異常な長い揺れで、まともな地震ではないと思った。自宅は半壊状態になったので、地域でも建物が倒壊すると思い、救助と火災を考え、すぐに消防法被を着て出た。その時も津波は考えていなかった。

マイカーで地区内を巡回パトロールした。副分団長が岩子地区なので、管轄内をずっと見ながら副分団長の家まで行くと、副分団長は津波の避難広報をしますと言うので、続けてお願いすることとした。新田地区に建物倒壊が一軒あったが、他に大きい被害はないことを確認してから、倒壊した所に戻って、救出の必要がないことを確認してから、自分の地区をまだ見回っていなかったので戻った。そこで、津波とぶつかった。

15時40分頃相馬に津波が来たという記録があるが、地震が来てから１時間たったぐらいだろうか。柏崎あたりでカーブで建物の先が見通せないところがあり、その建物の上に黄色い煙が幅広く高く見えた。色がちょっと変だなとは思ったが、火事かと思ってそっちに向かった。道路を曲がって建物から出た途端、津波が100m～200m先に見えた。黄色い煙は津波だった。それは、材木のかたまりで、水なのか土埃なのか、わからない状態で、２方向から波が来た。松川浦は真っ黒な波で、あまり速くはなかった。自宅は高台にあるので、まわりの人に「津波だ！」と伝えながら、家に戻った。この時ラジオは付けておらず、津波警報も聞いていなかった。消防署と直接連絡をとれる手段はなく、市の防災無線を使って、無線か携帯電話で、市の防災と連絡をとりながら走ってい

た。自宅に戻り、家族７人を息子が運転する車２台に分乗させ、５分くらいで高台へ行った。高台からは見通しが悪く、津波は見えなかった。父母は軽トラックで別の場所に逃げ、その後、避難所となった飯豊小学校で会えた。

女房や他の人たちと力を合わせて救助

それから、家族を高台に置いて女房を助手席に乗せ、２人で津波の様子を見に行った。少し浸水していたが、走れる状態の道路を通って被害状況を見て回った。団員が１名いたので聞くと、男の人が１人、瓦礫がびっちりあり下の状態がわからない中、瓦礫と瓦礫に挟まれて動けなくなっていた。一緒にいた団員は若い人だったので、若い人を傷つけてはいけないと、近くの民家からロープを借り、女房に端を持ってもらい、自分が瓦礫と水の中にザブザブと分け入った。長靴の中にも水が入り、身体も水に浸かって重くなったが構わず進んだ。瓦礫の上に行ったら、２ｍ以上の深さがあって、男の人は全然動けない状態だった。女房や近くにいた５人～６人にロープを引っ張ってもらって、男の人を無理矢理引き上げてもらい、助けた人を国道６号の先の公立病院へ運んでもらった。

その男の人を救助している最中に、柏崎地区前の100haくらいある田んぼの中央から「助けて～！」という女性の声が聞こえてきた。道路から100ｍくらい下がった所にいた。相馬市の災害対策本部に連絡を取って、ヘリの要請をしたが来られないと言われた。手を付けられない状況で思いあぐねていたところに、第３波が来た。目の前に広がった瓦礫全体がギューギューと、無気味な音を立てて動いた。田んぼの真ん中にある少し高い舗装道路の上に行けば大丈夫と思って、ロープを持って手探りの状態で道路を渡って行き、その女性目がけてカウボーイのようにロープを投げたが届かなかった。すると、その20歳くらいの女性は水に浸かっていたのに元気で、自分で数ｍの距離

懸命に捜索活動を行う消防団
（相馬市役所提供）

を泳いで来てロープにつかまってくれた。それで引き上げ、手を怪我したくらいで救助できた。市に連絡したがなかなか来ない。水から出ると女性が寒がったので、一旦自宅に行って着替えをさせてから、女房がマイカーを運転して病院へ連れて行った。その間、私はこの辺りを捜し回ったが、生きている人はもう他にはいなかった。生存者２人の救助に、両方あわせて30分～40分くらいかかった感覚だ。

効を奏した津波避難の呼びかけ

飯豊地区で1,200軒ぐらいあるうち津波被害を受けたのは350軒～400軒ぐらいで、人数的には1,000人以上が被災した。新田地区では逃げる途中で津波に飲まれ、流されたということだった。

消防車から「津波警報が出ていますので避難してください」と呼びかけたのがよかったと、後で地区の住民から言われた。ただ、広報が来たから、すぐに避難ではなかったと思う。そのうちに津波が見えたから避難したと思う。何も呼びかけをしなければ家にいたと思うが、広報したので外に出て気づいたのではないか。今までも何回か津波警報が出て広報し、いくらかの潮位変化はあったが、今までは逃げなかったから。

独り暮らしや高齢の人を名簿にはしていないが、地元の一員として把握している。岩子地区

で、独り暮らしの年配の男性が１人亡くなった。副分団長が呼びかけに行ったが、「ここには来ないから大丈夫」と言って逃げなかったという。副分団長はあきらめて、堤防の上の方にいるおばあさんを車に乗せ避難させると同時に津波が来て、津波に追いかけられながら避難した。副分団長は、「もし、おじいさんに手間取っていたらおばあさんも助けられず、自分も助からなかっただろう」と言っていた。

この地区で津波で亡くなったのは３人ぐらい。丘がいっぱいあり、また、松川浦に入ってから津波のスピードが落ちたようで、津波を見てから逃げても間に合ったが、磯部地区は平坦で高い所がなく、車に乗っても間に合わなかったのではないか。

深夜まで及んだ警戒活動

第７分団の団員で専業農家は自分くらいで、兼業農家もいるが、ほとんどが会社員なので、日中いない人の方が多い。市役所職員で団員の場合、市の業務を優先することになっている。震災当日はあまり団員は集まれず、３名～４名は出動していたと思うが、把握していない。飯豊（柏崎）消防団員は全員が無事で、ポンプ車６台すべてと、救助関係の資機材なども大丈夫だった。岩子地区の屯所は１階が浸水したが、外観は残っていて、修理して使える。消防の車は避難誘導、広報していたので、車は助かった。

排水所はもともと県管理だったが市の管理になって委託され、この地区のすべての排水所を私が管理している。翌日からの捜索を考えると、この水の状態ではできないと思い、何とか排水できないかと思い、発電機があれば汲めるかと思って近づこうとしたが、大きい船や瓦礫があって近づけなかった。翌日になると排水所に行くことはできたが、排水はできなかった。

また、息子たちが避難所（飯豊小学校）にいるので、そこに行ったり、近くの親戚の安否を確認

相馬市尾浜の被災状況

した。暗くなってから、全員確認できた。その後、妻と一緒に自宅に戻り、家の片付けはそのままにして、休んだ。どこから手をつけたらいいかわからない状態だった。

当日なのか翌日なのかわからなくなっているが、夜11時頃地震があった。津波警報、注意報が何回も出た。警報が出るたびに、車で見て回り、広報に回ったが、マイカーなので呼びかける装備がついていない。柏崎地区の屯所は、家から西の方へ200m行ったところだが、そこには行かず、マイカーで回った。広報のルートは各班ごとに決まっている。住民は、皆逃げるのが早くなった。

この地区では火災はなかったが、他の地区であったので３回～４回火災で出動した。

震災翌日からの遺体の捜索活動

翌12日になって、相馬警察署から要請があり、市の災害対策本部から警察に集まってくれと連絡があった。相馬市役所のそばの長友公園に団員が集まり、遺体捜索の手順について、相馬警察署から指示・指導があった。

遺体が見つかった時は、場所を特定し、ガムテープに時間、人、場所等を記入しておき、搬送しやすい道路などに置くが、遺体を集める場所は決まっていなかった。見つかった場所を市の本部または警察に連絡し、警察が遺体を収容した。最初は田の水の中から、道路まで引き上げた。

建物１階部分が破壊され、住めない状態

震災翌日から１か月後までは、消防団員のほぼ全員が出ており、分団長、副分団長は毎日出た。飯豊（柏崎）消防団員全部で79名いるうちの50名～60名は捜索に出た。自衛隊の到着は大分遅れ、3月12日から、消防団員だけで２日～３日やり、遺体を１日に10数人くらい、３日間で20人～30人は引き上げた。４日目以降はぽつぽつ警察が参加し、見つけたら警察に連絡し、警察と一緒に遺体を引き上げたが、警察がいない場合もあった。引き上げた人は磯部地区から流されてきた人が多く、磯部で亡くなった９名の団員のほとんどは消防団が引き上げたと思う。最後に分団長、副分団長が見つかった。

捜索は５月８日まで約２か月間続き、毎日捜索した。活動する団員は徐々に20名～30名と減っていき、１か月後くらいから交替制になった。最初は会社も止まっていたので出られたが、次第に会社も始まって出られない人も出てきた。５月８日に一斉大捜索をして、それがひとつの区切りとなった。

津波だけでなく原発も

私たちの所は津波だけでなく、原発もあった。３月12日か13日の爆発した日は市役所にいた。市長、副市長、団長、私と副団長がいたところに、自衛隊から市に「自衛隊員が完全防備で市民を避難させてください、と命令がありました」と言ってきて大騒ぎになった。翌日から団員を捜索に出して良いだろうかと心配したが、その後確認したら、間違いだとわかった。

捜索しながらも本当に大丈夫なのかという気持ちはあったが、自衛隊や警察が逃げたら一緒に逃げろというぐらいで、場当たり的な対応しかできなかった。国の発表が大丈夫なので、捜索は続けましょうとなった。国が逃げなさいと言えば逃げるしかないが、国の発表以外、情報がない。どれぐらいのレベルが安全かわからないが、市長は医者で放射能がどういうものか、ある程度わかっていると思うので信用する。息子は、スクリーニングを受けた。

消防団活動の課題等について

そんな重装備で捜索に行くわけではないから、今の消防団の装備については特に要望はないと思う。ゴム手袋は市から配布されていたし、個人装備の中では“合羽”が役に立った。防寒・雨対策になったし、原発の方での捜索では、防護服があれば良かったけれど、捜索が終わったら、水をかけて洗い流し、除染するので役立った。水の中で捜索するのに、胴長がもう少しあっても良かったが、徐々に配備された。食糧は、朝・晩は避難所や自宅で食べ、昼は市から出た。ガソリンは不足がちだったが、緊急車両ということで、優先的に入れてもらえた。

一番心配したのがケガだった。団員でくぎを踏んだのが３名ほどいるし、転んで手を骨折した団員もいる。団員は、捜索活動の最中、毎日、悲惨な遺体を軍手の上に、ゴム手袋をした程度で運んだので、精神的に異常が出たら困ると思って調べたが、幸い誰も心のケアを必要としている人はいなかった。屯所に、家を流された団員が４名～５名泊まっていた。柏崎地区は電気・水道がしばらく止まっていたので、発電機を持ってきて、団員同士お互いに助け合って、精神的ケアができたと思う。

亡くなった分団長らの無念の意志を継ぐ

福島県相馬市消防団
第９分団第１班　機関員　**遠藤　一美**（33歳）
消防団歴　12年（会社員）

とんでもない揺れと大津波警報

自分は、平成10年に19歳で入団した。地元の磯部地区は団結力が強く、消防団はチームワークが良い。火災より、水害で毎年のように出動していた。津波が来る２日前の昼頃津波注意報が出て、漁協職員として、磯部漁港の水位を気にしていたが、さほど下がらなかった。津波注意報が出ても20㎝～30㎝くらいだろうな、と思っていた。

３月11日、地震で揺れた時は漁協組合の事務所にいて、机の物は出るし、ファイルや棚もバタバタ倒れ、足の踏み場もないほどだった。支所の女性事務員がワンセグを見て、しきりと「大津波警報発令」と言うのを聞いた。「大津波警報」なんて聞いたこともなかった。

漁協の外に出たら、漁港は地盤沈下と液状化がすごくて、電柱が倒れたりしていた。上司の指示で午後４時に集まることになり、すぐ1.5㎞離れた自宅に車で戻った。自宅は瓦が落ちた程度で、祖母と母、妹と子ども２人の計５人に毛布を２枚もたせ、車２台で磯部小学校へすぐ避難するように言った。

地震から15分後の午後３時頃には、作業着に消防法被を着てアポロキャップをかぶり、200m先の屯所に行って消防車に乗った。亡くなった分団長が、自分より先に消防車に乗っているのを見て、「分団長、今日も早いな」と思った。午後３時５分～10分頃、大津波警報が出ているので、真っ先に屯所から300mの距離にある海を見に行くと、見たこともないくらい水が引いていた。そこに亡くなった団員１名もいた。「“ガラッ潮（＝磯部の方言で潮を引くことを言う）”っすか？」と聞くと、「やばいな～」と言っていた。

それから、小学校の状況を確認した後、住民への避難広報で、大浜、芹谷地、大洲地区へ下った。途中で、第９分団長の消防車とすれ違った時、向こうは３名で私の車は１名だったので、分団長に「１人では危ない。何かあったら困る」と言われ、団員の川西君をもらった。

決死の避難誘導と救助

磯部地区の２㎞先の民家がある漁港まで、「大津波警報が発令されました。直ちに避難してください」とスピーカーで何回も繰り返し、古磯部集落の海周辺の人や、丘で津波を見ていた住民20人くらいにも逃げるよう呼びかけた。漁港まで避難勧告しながら下りていく時、消防車２台を見た。その後、もう一度消防車と、団員の自家用車が１台加わったのを見たのが最後だった。そのまま小学校へ戻るんだろうと自分では憶測していた。

15時40分～50分頃、大洲の松林の間に水が入って来ているように見えたが、気のせいかと思ってＵターンした２、３秒後、バキバキッと松林を巻

き込んでいく音がして、振り向いたら水しぶきと土埃りがバーッと上がった。堤防ではじいてバーンと鳴り、２倍の大きさになったのを見て、「津波だ！」と実感した。砂利の抜け道を通り、大きな道路に出た時、大型トラックの運転手が車を乗り捨てて走っていたが、どうしようもなく、申し訳なかったがそのまま走った。

自分たちは緊急のサイレンを鳴らして走り、磯部地区のパトカー１台と一般車３～４台を抜き、海側に向かってくる車30台ほどにクラクションを鳴らし、ジェスチャーをしながら「戻れ～！」と絶叫した。皆、気づいてＵターンしたので、30人～40人の生命を救ったことになるのだろうか。

ここまで津波が届かないだろうと思う所で車を止め、磯部地区にいる人を全部出し、海に向かう車を止めようと思った。自分が逃げるというより、人を助けなきゃ、という思いで必死だった。磯部地区の先の柏崎集落も危ないのに、皆津波が来るイメージがない。自分たちが助けないと被害が拡大してしまう。飯豊郵便局の先の公会堂に行って避難を叫び、また戻って新田地区で車を入れないようにした。磯部地区に来た津波は時速40㎞ぐらいだったが、松川地区、岩子地区は時速20㎞くらいの速さで、ドローッとした真っ黒の波だった。

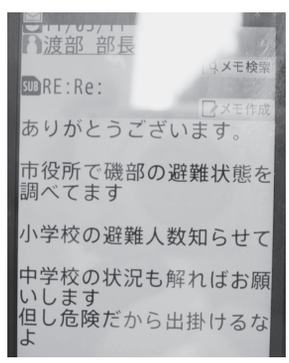
家族が小学校に避難しているのを思い出し、あの津波の高さでは小学校も危ないと思い、警官に聞くと、「これ以上行けない。磯部とは連絡がとれない」と言う。でも、どうにかして入りたいと思い、４駆でないと入れないような道を走った。途中で大浜の山から磯部地区を見ると、海も静かで、何事もなかったかのように一面水浸しだった。水が流れるだけの寂しい音しかしない。

絶望的な気持ちになり、腰が抜けるかと思ったところに、男の子（小１）の「助けてー」という声が聞こえた。引き波で引かれた子どもが、後ろのフェンスで止まり、膝まで浸かって震えていた。熱くなった同僚がすぐに走っていき、目の前の“川”に夢中で入って、男の子を助け上げた。すぐ近くの熊倉さん宅に磯部地区の方が10人くらい避難していたので、恐怖で話せない男の子をそのまま預けた。その子の母親と弟は、その先で他の人に助けられていた。

相馬市原釜尾浜海水浴場付近の被災状況

家族のいる避難所で生命をつないだ携帯メール

再び小学校へ向かうが、そこも道路が塞がれており、車を降り、山の方のルートは危険なので、２人でトビとロープをかけて、助け合いながら歩いた。山の上から見たら、古磯部集落も何もなかった。しかし、悲しんでいる場合じゃないと、ひたすら歩いた。古磯部集落にいた団員から、消防車２台が津波に巻き込まれたのが目撃され、自分も死んでいると思われていたと分かった。でも、団員たちは助かっていると思いたかった。



命が繋がった、
渡部部長からのメール

16時半ぐらいに小学校に着いた。学校の上から見ると、まるでドミノ倒しのようだった。その日は吹雪にもなり、暗くなるのが早く、停電もしていた。避難者は小学校の教室におり、家族も無事だった。小学校では校長先生を中心に緊急対策本部を設置し、公民館長、自治会の区長が、小中学校の避難者名簿の作成と人数把握をしていた。19時～20時くらいに自分たちも対策本部に入った。

16時40分頃に来たメールで「大戸浜壊滅状態」

を知った。18時７分に、漁協の渡部部長から、磯部にいる部長の父（区長）の安否確認メールが来た。「自分が市役所に行って知らせるから、分かる範囲でいいから教えてくれ」と言ってくれたので、18時20分頃「磯部の避難状況：小学校320人、中学校には120人」、「磯部は壊滅状態。つながる道路はすべて封鎖」と返信した。避難者名簿で、部長の父親の「名前は見つからない」とも返信した。区長だった父親は、隣や近所の人に避難勧告して回っていて、亡くなったようだった。

夜12時頃、市役所から20人くらいが懐中電灯で照らしながら、救援物資と炊き出しなどを持ってきてくれた。部長からメールが来なかったら、磯部地区は陸の孤島の状態だったし、次にどうしたらいいか分からなかった。神様かと思った。渡部部長が市役所へ行ってくれたので、“ライフライン”がつながったのだ。

小学校は、水浸しだった我々団員には暖かくて助かった。狭い教室にギュウギュウに人が入っていたが、炊き出しも届き、安心感はあった。その夜は余震がすごくて、子どもがそのたびに泣き、興奮している大人がうるさくて眠れなかった。団員も、津波を見たから興奮状態だった。磯部をもう一度見たいと、団員２名で坂に座って明るくなるのを待って、磯部を見ていた。明るくなるにつれ、段々見えてくる風景は悲惨な状態で壊滅的だった。漁港はあんなに近かっただろうか？

二次避難所への脱出と長期に及んだ捜索活動

翌３月12日朝、救援物資を運んだり、人命救助にあたった。警察ではないが、自分たちでできることとして、亡くなった人を選果場へ運んだ。市の対応は早く、通れなかった道路を修復し、避難者を移動するためのバスを10時前から待機させた。同時に、相馬市消防団本部の人が来て、その人の指示に従って動いた。かなりのバスが来て、消防団は誘導に回った。正直、分団長が亡くなり

１階から２階部分が津波で破壊された建物

不安な部分もあったが、皆で意見を出し合い、個人個人の力量で動いた。

避難者の誘導のため立っていたら、偶然にも自分の妻と子どもが真っ先に出てきた。両手を広げて子供を迎え抱きかかえたら、張りつめていた気持ちが切れ、堰を切ったように涙が流れた。相馬市内に用意された避難所に向かうバスを、家族がやっとこれで助かると感無量の思いで見送った。

正午頃、二次避難所の相馬のはまなす館（総合福祉施設）に、小・中学校にいた400～500人が到着した。蒲庭公会堂にも80人くらい避難していた。団員50名弱で、消防車５～６台で行ったりきたりして人の割り振りをし、３時過ぎ頃解散した。夕方解散後、家族がいる所に向かったが、運転するのも億劫なくらいクタクタだった。

13日は、９分団には仕切る人がなく、連絡が来なかった。この日は、休んだが落ち着かない。知り合いと相談して、14日から活動を再開し、相馬市全体で磯部地区の捜索をした。毎日夕方まで、ずっと人捜しをしていた。その間、誤報の大津波警報が出たり、原発が爆発したと聞き、何が起こったのかわからなかった。警察の人に呼ばれて顔を確認するが、確認できる状態ではなかった。家族になるべく早く知らせてあげたいという思いはあったが、分からなかった。

仕事と住まいと相馬の復興

震災時に勤めていた漁協は、原発関係でリスト

ラしようとしていたので、自分から先に退職し、相馬で２カ月位で復興した会社にパートで入社した。仕事しながらも、いろいろ思い出しては泣いてしまう。自分は、性格的に明るいと言われており、そう振る舞わないとやっていけない。家もなくなってしまい、正直どうしたらいいか分からないが、前に進むしかないんだ。

磯部地区は町から遠いが、食べるものも美味しいし、涼しく、いい所だとずっと思っていたのに、こんなになってしまった。土地も沈下しているので、もう住んで良いという許可が出ないと思う。相馬港の映像をテレビで見ると、自分はこれから逃げたんだ、バキバキッと来る津波と、よーいドンでよく助かったなと思っていたが、最近は思い出すと気持ちが悪くなる。時が経つに連れフラッシュバックがあり、被災直後から津波に追いかけられる夢を見る。津波にもまれ、結局は助かる夢だが、毎日のように見ていて、きつい。最初の頃は良く寝れず、未だに津波関連の夢を見る。

消防団の呼びかけを聞いて避難した人から、「助けてくれてありがとう」と言われたこともあったが、避難所にいた人の中には、途方に暮れて、「死んだ方が良かった」というお年寄りもいた。「生きてていかったんだよ」と言うが、何て声をかけたらいいか分からない。

磯部地区９分団１班は若い人が多かったが、原発問題もあって、今はてんでばらばらに転職した。今後どうなっていくのか不安だ。今は、磯部から離れ、黒木地区の県借り上げアパートに、叔母と住んでいる。津波を見ていなければ磯部に住み続けたいと思っただろうが、今は浜にはいられない、山の方に行きたいと、町で土地を探している。磯部には先祖の墓があるので、相馬から離れるつもりはないが、まだ気持ちは固まっていない。

原発問題がひっかかってしまうが、相馬の復興は早いと思う。今は自分のことで手一杯だが、農青連（米作り）の委員長になっているので、そちらの復興などに取り組みたい。同じ消防団でも温度差があるが、一緒に相馬市復興をやっていけたらと思う。

災害体験を語り継ぎ、伝えて行く

津波が来るまでに１時間くらいあったのに、逃げ遅れた人がいた。津波は来ないという言い伝えがあり、磯部で生きてきた年寄りはもちろん、現に、自分も来ないと思っていた。

岩子地区は道路が東西、高台に続く何箇所かの道があるが、磯部地区は海と平行の北南の道路しかなく、平坦で高台は１箇所だけで、後の小学校に行くしかない。堤防がなければ海と同じ高さで沈下もしている。磯部大浜は300軒くらいが平地に密集しており、うち250人弱が亡くなった。磯部地区の９分団で９名の団員が亡くなった。団員５名が亡くなった４班は漁師が多くて地震直後にすぐに集まれ、会社を早退して来た人がやられた。５班では団員２名と自営業の分団長と漁師の副分団長が亡くなり、津波から逃れたのは俺ともう１名の団員だけだ。その時は無我夢中で、人助けと思っていた。助かったのは運だと思うが、とっさの判断力、道路の地理感などが大事で、その時は意外に冷静に対応できていた。

自分は生かされたと思う。もし、残った自分たち２人も生きていなかったら、どういう体験をしたのか伝えられなかった。助かった時の「自分の命を守って、人を守る」という貴重な体験談を語り続け、伝えていきたいと思っている。「自分が生きてなければ人も助けられない、自分の命を守れなければ人は助けられない」のだ。

これから消防団活動を続けていく覚悟を新たにするためにも、亡くなった団員の顔を見ておこうと合同葬儀に行った。皆、口を開けたままの苦しそうな顔で、ショックで自分にとっては耐えられなかった。最近よけい気が重くなったが、そうならないために、助けないといけないという使命感もある。そこをどう若い人に伝えていけばいいのかわからないが、あまり熱くなりすぎず、うまく、難しくなく、自分らしく伝えていきたい。

多数の生命を救ってくれた消防団員に報いるため

福島県相馬市長　立谷　秀清（60歳）

地震災害に備えた図上訓練の実施

相馬市は中村城を居城とする相馬中村藩の城下町として、二宮尊徳の教えをもって耕地面積を拡大していったので、谷に向かってずっと水田が続いている。住民は“謹厳実直”な性格だ。

相馬市では、防災訓練などをフォーマットにのっとってやっていたが、学芸会のようなバケツリレーをしていてどうする、デモンストレーションの訓練ではなく、実践的な訓練をしておかなければならないと、私が発案してこの２年間、毎年、想定外の図上訓練（注：状況を事前に知らせずに行う突然付与型の図上演習）をしていた。体育館に皆を集めて、消防団の代表や自衛隊にも参加してもらって、２～３時間かけてやっていると、くたくたになる。反省会の総評では、毎年、「市長がすべてを仕切りすぎだ」と指摘されていた。「すべて市長に持って行くから、市長が仕切ってしまう。こんなことは現場ではありえないから、市長のところに持って行く情報をトリアージしないとだめだ」という評価を２年続けていただいていた。

だが、今回の大震災の経験から、リーダーが全体状況を把握していないと、被害やリスクを最小限に抑えるための最低限の判断、指示ができないことがわかった。どこまで詳細にリーダーたる市長が把握しているかということだ。（復興）本部会議を今でもやっているが（平成23年10月末現在）、事態がだいぶ進んでいてポイントの部分だけ会議でやるが、１時間半の会議で、皆が報告し、私が決済するというスタイルになっている。

消防団に「逃がせ！」の指示

３月11日午後２時46分、地震が起きたとき私は市役所庁舎の１階にいて、揺れが収まってから３階の庁議室に駆け込み、計画どおり幹部職員を集めた。２時49分に津波警報後、「大津波警報」が発令されたので、すぐに防災行政無線で避難広報の放送を行い、相馬消防署と市消防団が避難広報を開始した。

地震発生の９分後の２時55分に相馬市災害対策本部を設置し、第１回災害対策本部会議を開いた。ここでまず私が指示したのは、気象庁の発表では１～３ｍの津波が来るということだったが、私が経験した中で一番大きな地震であったことから、海岸部の集落の「原釜（はらがま）」地区を担当する市消防団第３分団と「磯部（いそべ）」地区を担当する第９分団に対して、住民を避難誘導すること、その他の内陸部の分団には、倒壊家屋の下敷きになっている人達を捜索、救助すること、と指示した。私が最初に言ったのはこの２つだけだったので、あっという間に第１回目の災害対策本部会議は終わった。

本市の消防団に配備している無線は、去年デジタル化し50台配備してあり、これだけが通話可能で、携帯電話は通じなかった。約１時間後、３時53分に消防団第７分団から津波来襲の報告があり、３時54分に市議会議員でもある第３分団長から、国道６号まで波が来ているという情報が入ってきた。が、最初はまさかそこまで津波が来ているとは思わず、川沿いに入ってきた波が溢れたのだろうくらいに思っていた。

公共施設や災害弱者施設の被害状況把握も指示していたので、家屋倒壊や道路陥没などの被害情報が次々に入ってきた。地震の揺れで亡くなったのは、スーパーマーケットの壁が崩れ、その壁に頭を直撃された26歳の女性１人であった。

災害対策本部に入ってくるすさまじい被害

津波来襲の知らせがあった後、午後４時を過ぎた頃から、人が乗ったままの救急車が流された、古磯部地区のほとんどの家屋が津波で流失・倒壊、デイサービスの送迎バスが津波にのまれ３人死亡、建物火災で４棟全焼など、次々に信じられないような情報が入ってきた。また、あちこちに孤立している人達がいることもわかったが、磯部地区の第９分団からは、相変わらず連絡が途絶えたままだった。

災害対策本部に入ってくる情報をどんどん職員がホワイトボードに記入し、私がそれぞれの対応策を指示した。午後７時30分に、第２回災害対策本部会議を開き、私は、①孤立地域を把握し、孤立者の救出と避難誘導、②避難所における避難者の状況把握及び食料・飲料水・毛布などの確保、③自衛隊への救助・救援要請、④警察・消防等機関からの情報収集、⑤他市町村への支援要請（給水車の手配）を指示した。そして、ご遺体が見つかっていることもあるので、７時32分に遺体安置所を指定した。

午後８時13分、自衛隊福島駐屯地から、自衛隊の第１陣が到着し、自衛隊と消防の車両が救出のため出発し、自衛隊と警察、消防・消防団が連携して、夜を徹して孤立者の救助にあたってくれた。

打ち合わせ中の立谷市長

午後11時、翌12日午前４時にも災害対策本部会議を開き、今後の対策をまとめた。緊急的な課題として、人命救助に該当する孤立者の解消、避難者の救援、行方不明者の捜索の順に優先順位を付け、その先にある課題として、がれき置き場の確保から家をなくした人のためアパートの手配や仮設住宅の建設場所の確保をすぐに行うよう指示した。給水車が１台しかないので、私が真夜中に各所に電話したところ、米沢市が給水車を出してくれることになった。ありがたかった。

また、この段階で地域再建に向けたレールを敷いて、目標を定め、着実に進んでいけるように中長期の対策をまとめた。

語るときりがない災害医療

災害医療というのは次の死者を出さないことが目標で、語るときりがない。

災害発生直後の救助活動の次にやることは、長期的に見て死者を出さないことであり、健康障害、経済自殺、孤独死のそれぞれに対策を打ってきたつもりだ。せっかく消防団員達が助けてくれた命だから、病死なんかさせるものかと思う。助かった人達も居住環境が悪いと病気になる可能性が高くなるので、居住環境を向上させる手立てが

必要となる。

相馬市内で入院設備のある病院は公立相馬総合病院と私が理事長となっている病院の２つしかない。この２つのうち１つでも欠ければ災害医療に支障を来していたが、どちらも無事であったことが幸いだった。２つ病院が最前線のようになり、ここを起点として支援に来てくれた医師達が避難所での診察にあたってくれた。東京医大の臼井学長や全日本病院協会、日本医師会等多くの医療関係者に大変お世話になった。本当に助かった。心から感謝している。

８月に本県の奥会津地方と新潟県で豪雨災害があった。被災地で水が必要であるとのことだったので、新潟県三条市、本県の只見町、金山町に水を届けた。この水は、本市の水源地が原発事故の影響で使用不可能になった場合に備えて備蓄していた水の一部である。

相馬市は、東日本大震災で多くの方々から助けていただいた。困ったときはお互いに助け合いだ。

沢山の人の生命を助けた消防団

今回の震災で津波の被害にあった地域には５千人ちょっといた。そのうち、死者、行方不明者の合計は458人なので、９割の人は助かった。９割の人を助けた功績は大きい。助けたのは市消防団だ。

原釜地区では高台まで比較的避難できたが、磯部地区では高台に向かって逃げるのは難しく、道路を通って長い距離を逃げた。磯部地区の家はほとんど津波で流され、地区全体壊滅している。磯部地区で９人、原釜地区で１人の消防団員が殉職している。避難誘導に向かった消防団員で行方不明になっていた消防団員達が次々と消防法被姿で見つかった。今回の震災、特に津波は、我々の訓練以上のものだったのに、消防団員達はよくやってくれた。後から聞いた話だが、「父ちゃん、一緒に逃げよう。」と子どもが止めたり、母親が息子に一緒に逃げるぞと言ったのに、残って避難の呼びかけに回った消防団員達が亡くなっている。消防団の車に乗っていれば逃げられたはずだが、消防団の車も流された。地域住民や仲間を置いて逃げられなかったのでしょう。彼らは最後まで任務を遂行してくれた。

被災現場で話を聞く立谷市長

私は、行方不明になっていた消防団員の中で最後に分団長が見つかった日に思い立って、消防法被を着て執務することにした。これは、４月の末頃に暑くなってやめたが、ふだんから、大臣達に会う時も、災害対策本部会議や外での行事の時も、ずっと着続けた。

メールマガジンNo.250（2011年４月４日号）
消防法被

あの時に、家族を振り切って避難誘導に向かった団員たちのご遺体が、次々と消防法被姿で発見されるなか、長らく行方不明だった稲山分団長が無言の帰還を果たした。とても責任感の強い人だったから、最後まで住民避難に走り回ったのだろう。私に、郷土を想って殉職した怨霊の一分でものり移ってくれと念じ、クローゼットにあった消防法被を着けて執務することにした。

残された家族たちは、しかし、現在７か所に整理された津波被災者の避難所で健気に整然と暮らしている。ブロックごとにリーダーを立て、規律正しく、諍いもなく、笑顔を絶やさずにである。

家族を失い、家を失い、生活手段を失った被災者を支えているのは、地域のコミュニティであり彼らの礼節である。浜で育った私もそうだが、被災地の、自然を畏敬する漁労集落の人々の社会感・人生観は、集団の一員であることを特に大事にする。

外国人が驚嘆する日本人の落ち着きが、もっとも著明に顕れているのは、この相馬の避難所に違いない。

相馬市消防団慰霊祭

親の気持ちになって創設した震災遺児・孤児支援金

殉職した消防団員のご家族と避難所でお会いした。かける言葉がみつからなかった。しかし、ご家族は取り乱すことなく、凛として当時のことを話してくれた。そのことをメールマガジンに書いたら、日本中に流れて、英訳したものが世界中に流れた。

私は、消防団員が波の中で何を思ったか、親が子ども残して死ぬとき、何考えるべ、と思った。彼らは目の前に波を見た。逃げようと思えば逃げることができたと思う。でも彼らは、命をかけて避難誘導した。殉職した団員の多くは若い団員で、小さな子どもを残して死ぬのは、さぞ心残りだったろうと思う。消防団員の子どもだけでなく、親を亡くした子どもは50人ほどいる。親の代わりはできないけど、義援金というか、そういう子達に毎月３万ずつ仕送りしようと考えた。

相馬市民は、命懸けで避難誘導して９割の住民を助けた消防団員のことを忘れてはいけない。子ども達の親たちのことを考えたら、毎月３万円の支援金だけでなく、大学にやるまで考えなければいけないと思った。いろいろな所で講演して「みんな頼むわ」と協力を呼びかけたら、世界中から募金が集まり、３億１千万円集まった。大学の学費が１人600万円かかるとして４億円あれば間に合う、もうすぐ目標まで到達できる。

次に考えるのは、父親がいたら、子どもの勉強みてやるとかするだろう、それに代わって我々がすることは、勉強させたり、学力をつけさせたりすることだろうと思った。特に親を亡くした子ども達のＰＴＳＤを心配し、ＰＴＳＤ対策チームを作って、心のケアなどフォローアップをやっている。もうひとつは学力向上に取り組んで、消防団の子ども達を含めて全員大学にやろうと考えている。今そのために動き出した。奨学金までは目途が立ったので、学力向上のための特別教育をやろうということだ。それで、９月10日に市が主催した消防団の慰霊祭の時に代表して祭壇に語りかけた彩音ちゃんの話をメルマガに書いた。彼女は、「集落の人々を救おうとして殉職した父を私は誇りに思います。父のように人の役に立てる大人になりたいので、勉強をして大学に進み、将来は保育士になりたい」という決意を言った。消防団員達の子どもだけではない、相馬の将来を担う子ども達全員の成長こそが希望なのだ。

（震災孤児等に相馬市から支援金を支給するための「相馬市震災孤児等支援金支給条例（相馬市条例第11号）」は、平成23年４月26日に相馬市議会臨時会で可決成立、施行された。）

メールマガジンNo.251（2011年４月24日号）
震災孤児等支援金支給条例

被災から40日たって巨大津波の相馬市の被害の全容が明らかになってきた。

まず、床上浸水以上、つまり津波による流水の前に住人が生命の危機に曝された家屋が1,512世帯、住民基本台帳での人口は、前回から修正して5,249人だった。その中で、今日の段階で死者および行方不明者の合計は475人。津波襲来の時にこのうちの何人が被災地にいたのかは不明だが、現段階で死亡者の数が一割を切っていることには、驚きと感謝の気持ちを禁じえない。原型をとどめた家屋がほとんどない程の大津波から、９割の住民を避難させたのは地元の消防団員たちだった。

しかし、その犠牲者数は前回のメルマガ時から３人増えて10人となった。

磯部地区の方々が集団で避難生活をしている「はまなす館」で、殉職された消防団員のお母上とお会いして首を垂れた。息子を亡くした心中を察するに、私は何と申し上げたら良いか？お詫びしたい自分の気持ちをどのようにお伝えすべきか？迷いながら視線を上げた私の前で、背筋を凛と伸ばした彼女は気丈だった。

「止めたのに、仕事だからと言って避難誘導に向かった。やさしくて良い息子だった。残した子どもたちのためにも私はしっかり生きなくてはならない」

殉職した消防団員10人の子供の数は11名、うち18歳未満は９名である。社会人として自立する前の子供たちを残して、死んでいった彼らの気持ちを思うと胸が苦しくなる。さぞや無念、心残りだったろう。多くの市民を助けた代償としても、余りにも重く、辛い。相馬市が続く限り、市民は彼らを忘れてはならない。

我われ残された者たちが、父親の無念の代わりを果たすことなど、とても出来ないことだが、万分の一でもの償いと思い、生活支援金条例を作ることとした。遺児たちが18歳になるまで月々３万円を支給するものである。全くの孤児となった、あるいは片親だけを合わせ、今回の災害で親を亡くした18歳未満孤児または遺児は、全部で44人にのぼる。この子らが成長するまでの経済的負担の一部を、市の責任で担っていくことを市民の総意で決めようと考えている。今月の臨時議会にかけ議決を得しだい支給することとしたい。

財源は、遺児たちのための義援金の基金口座を作ったので、出来れば世界中からの善意をいただきたいと思っているが、不足する場合は市の一般財源で対応する。総額は約２億円。

もしも、義捐金がこれを突破することがあれば、次には大学進学のための奨学金などに充てていきたい。その際は条例を改正することになるが、もうひとつの条件は、孤児らに、将来強く生きていくための学力をつけさせることである。

相馬市の小・中学校は４月18日に遅れた新学期を迎えたが、心配したとおり被災地の子どもたちは、心の傷が学習の障害になっている。我われは、臨床心理士と保健師ら常勤６人体制による「相馬フォロアーチーム」を結成し、教育委員会の別働隊として被災児童生徒のサポート体制を敷いた。現段階で２年は継続することとしているが、仮に精神が安定した後もしばらくは、学力向上のためにきめ細かな指導を続けてもらいたいと思っている。

先日、私のメルマガを読んだというフィンランドと英国のテレビ局が取材に来たので、「貴国の友情をこの子らに！」と呼びかけた。ゆえに相馬市のホームページの義援金口座ワッペンは英語バージョンも用意した。

拙稿の読者諸兄にもご賛同いただけるよう、平身低頭。

辛かったが、やって良かった 遺体の捜索と収容

福島県新地町消防団
副団長　角田　正悦（58歳）
消防団歴　36年（会社員）

新地町の概要と被災状況

福島県新地町は、福島県の浜通りに位置し、北は宮城県山元町、西は宮城県丸森町、南は相馬市に接し、東は太平洋に接している。町域は東西1.2㎞、南北6.5㎞の台形状で、総面積は46.35㎢、人口は8,076人（平成24年年３月１日現在）である。町の主産業は、農・漁業であり、釣師浜漁港には、多種の水産物が水揚げされ、首都圏方面に出荷されている。

東京電力と東北電力の共同出資による相馬共同火力発電株式会社新地発電所は、１号機が平成６年、２号機が平成７年に営業運転を開始し、石炭火力としては日本有数の出力（100万kW、２基）の火力発電所である。

新地町消防団は４分団で、消防団員数は319名、そのうち12名が女性消防団員である。ポンプ車等18台で活動している。

東日本大地震では、新地町の谷地小屋で６強を観測した。地震から約50分後の15時40分、大津波が襲来した。町を襲った津波の高さは、10ｍを超えたとも計測されている。津波は、海岸線を越えて相馬・亘理線、ＪＲ常磐線を押し流し、国道６号まで遡上し、一部で国道６号を越えた。津波の浸水域は、町の面積の約５分の１にあたる約９㎢に及び15行政区30地区のうち11地区が浸水し、500戸以上の家屋が被害を受けた。津波により死者115人、負傷者３人、住家被害は全壊439世帯、半壊127世帯の被害が発生している。

揺れた後、会社から役場へ

消防団員は319名で、役場の職員も多いが、仕事を優先している。３月11日は、勤め先の車の部品製造会社で、ＮＣ旋盤をしていた。縦揺れがすごく、停電にはならなかったが自動的に機械は止まり、25人ほどいる従業員は、皆庭に逃げた。建物や電信柱も揺れ、石碑も倒れた。「ついに来たな」と思った。揺れが収まってから、社長にすぐ「対策本部に行きます」と言って、会社をぬけさせてもらい、自宅に一旦戻り、祖父母と女房の無事を確認した。消防法被を着て、10分かからず町役場２階の災害対策本部（町長室の隣の会議室）に行った。町長はいたが、他にはまだ誰も来ておらず、電話、携帯が不通のため情報は入っていなかった。町からの広報や防災無線は聞こえたようだが、私は車中にいて津波警報を聞いていない。

役場屋上から目撃した津波

役場に着いてから津波が来るという情報を聞き、津波が来る10分前位の15時20分～30分頃、４階屋上に上がった。引き波は肉眼では見えず、15

時36分～40分頃、津波が来襲したのを目撃した。１波目が盛り上がって堤防を越えて、釣師（つるし）浜にあるレストランラハイナが波で浮き、流れたのが見えた。１波目と２波目はあまり時間を置かずに、同じ方向から来たように思う。２波目は覆い被さって、釣師浜の住宅街を一気に飲み込んだ後、瓦礫が黙々と押し流されてきた。新地駅の方は、田んぼなので津波が一気に流れてきて、多分電車も流されたのが２波目かと思う。まっすぐ来た波と北側から来た波があった。

呆然として、「アーアーアー」としか声が出ず、副町長、議員など３人ほどがいたが、会話できなかった。津波のしぶきが堤防にあたって10mぐらい上がった写真などがあるが、この辺の津波はすごかった。

どこにも連絡がつかず、地震直後は団長も地元におらず、団の指揮の取りようがなかった。各班で自主的に消防団活動を行い、沿岸地区に行って広報した団員がいた。役場から東の踏切から沿岸地区に向かって「津波が来ますから逃げて下さい」と広報していた団員は、前方に津波が見えて引き返した。海の方に向かっていた車を止めて誘導して戻したが、無視して行った車もあり、消防車がぎりぎりで逃げる後を津波が追ってきたという状況で、かなり危険だった。津波ハザードマップでは、津波は常磐線で止まるという想定だったが、今回はそれをはるかに越えて川を越え、国道６号を越えた。役場は駐車場半分まで浸水した。

人員が少ない中で行った救助活動

16時過ぎ、津波が収まってから下に降りて、役場近くのスーパーに勤めている娘の安否確認に行く途中で、瓦礫の中から、自分と一般の方の２人で、１人を救助した。意識はあるが、肩掛けをしてようやく歩ける状態で、役場１階に避難させたが、避難者で混雑していた。

消防団員でもあるＪＲ新地駅の駅長は、電車が駅に着いた時に地震が起き、津波が来るというので乗客を電車から降ろして避難させた。電車の中に乗り合わせていた警察官２人が乗客を誘導し、本来の避難所である環境改善センターにも津波が来たので、隣の役場１階の会議室に避難させ、その後捜索活動にも協力してくれた。

私たちが救助した人は全身ずぶ濡れで、着ているものをハサミで切って全部脱がせ、保健婦が何名かいたので手当てをお願いした。毛布をかぶせたり、救急車の手配を頼んだが、後でまとめて搬送すると言われたそうだ。

日中で火を使っていない時間帯だったので、火災の発生がなく幸いだった。夕方、分署長が「火災情報は一切入っていない」と言っていた。火力発電所の火災については消防署には情報が入ったと思うが、消防団では把握していない。結果的には消えていたが、まわりの人が100人ほど避難し、翌日新地高校に移動していた。

計画では、役場の災害対策本部に団長、副団長、分団長が集まることになっていたが、全然団員は集まっていなかった。役場２階で指揮はとれ、分署長が消防署の無線だけで情報をとっていたが、情報は少なかった。団長、分団長も来て、夜になってあちこちに救助を求めている人がいるという情報が入った。

21時頃、「自宅に取り残されている寝たきりの婦人がいる」という情報が入り、消防職員５名と消防団幹部５、６名で一緒に救出に向かった。懐中電灯と点灯するライトで、瓦礫を乗り越えながら川の土手を下り、担架に女性を乗せた。あぜ道は狭く、ノロがあって滑るうえ、津波の残骸だらけで、パイプやガスボンベを乗り越えながら、役場に向かった。寒くて手が凍えて、担架を持っていられない。10人で運んでいたが、５分もたたずに休んでしまう状態で、交替しながら運んだ。戻って来たのは22時近かったのではないか。

団長がＪＡの担当なので、米を供出してもらい、役場で炊き出しのおにぎりが出た。水は断水していたので、給水車が来た。当日は暗くて見えないし、情報も入らないので、夜中の12時に団幹部は自宅待機となり、自宅に車で戻った。自宅の

屋根瓦は崩れ、壁に亀裂が入っていた。茶ダンス、テレビが倒れたぐらいで、わりと被害は少なかった。片づけはしばらくの期間、する余裕がなかった。娘が勤めているスーパーは津波に流されたが、娘は小学校１年生の子どもを迎えに行くために帰らせてもらい無事だった。発電機と投光器は準備していたので、水をもらいに行き、灯油ボイラーで風呂を沸かして入った。余震が連続してなかなか寝付けず、朝早く目が覚めた。

消防団による遺体収容作業（撮影／角田副団長）

翌日、遺体捜索活動を申し出る

３月12日に防災行政無線で団員の参集を呼びかけ、翌日は朝７時に66名が集まり、団長も来た。一日活動して、夜には解散した。ゴタゴタしていた。自衛隊は、記録では12日の１時20分に19名到着している。

行方不明といっても、連絡がつかないといった情報が多く、何件か捜索要請があったが、電話が通じず消防無線だけなので、確実な情報ではなく、行って探してもいなかったり、救助を求めているというので、確認したら元気で、確認だけとなったりした。

遺体が２体～３体あがり、団員１名も津波で亡くなった。沿岸部の埒浜地区の団員で、津波が来るというので自宅に戻り、母親を避難所（コミュニティセンター）に避難させ、もう一度避難誘導に戻る途中、車ごと津波に呑みこまれ、３月12日に田んぼで車の中で発見された。

遺体安置所を「老人いこいの家」に設置した。新地警察署長と相談し、「消防団に遺体を運ばせて欲しい」と申し出た。漂流物、金庫などの回収も話し合った。避難後に戻ったら泥棒に荒らされていたという連絡があり、警察に連絡して調査してもらうよう指示した。

消防署が担架、町が毛布を準備し、団員用に、ゴム手袋（薄手と厚手２着必ず着用）、マスク（支援物資）、長靴、ペットボトル（水）を準備した。原発の影響を考慮し、戻って来た時は外の水道で長靴の泥を洗ってから待機所に入るようにした。

３月13日は、消防団員120名～130名が集まった。被災したり、原発１号機が爆発して避難したり、原発に勤めていた団員は集まれなかった。自宅の周りの人も皆避難していた。義理の兄は相馬の人で、原発に勤めている。山形に避難するよう言われたが、捜索しないといけないし「逃げているどころではない」と返事した。地図に円を書くと、自宅のあるところは50㎞圏で問題ない。

12日はまだ水が引いていなかったので、線路の上から見てくるよう指示し、13日から本格的に捜索活動した。団長の挨拶後、副団長の私から捜索活動の内容を説明した。担当エリアは事前に相談してあり、訓練指導員とラッパ隊と第３分団で、５名一組で小隊を作った。緊急消防援助隊は、神戸市、岐阜県、佐賀県から来ていた。自衛隊の案内と捜索活動を同時に行った。鳥取県警が午後から７台21人入った。被災した集落の住民も10数人ほど手伝ってくれた所もあった。自衛隊や救助隊を案内するのに１名つけた。消防団が遺体を発見すると、トラックに積んでいた毛布にくるんで担架に乗せ、軽トラックに乗せて搬送した。緊急消防援助隊は来たが、救助対象者がいないので引き揚げた。福島県警と応援に来た警察は一緒に捜索に入っていた。

遺体捜索・収容から防犯パトロール

朝７時30分から対策本部会議が始まってその日の打合せをし、８時から捜索活動、11時30分に一旦あがり、また13時00分～16時30分まで捜索活動、17時00分に解散。幹部は18時くらいまで残っていた。行方不明者の捜索活動は約２か月間続き、５月８日に終了した。この間、４月30日と５月１日に一斉捜索（ローラー作戦）を行った。自衛隊や警察、消防と１ｍ間隔で並んで一斉捜索した。遺体搬送に全面的に協力したが、一番苦労した。自衛隊、警察が遺体を発見すると、無線で本部に連絡が入り、地図上のグリッド線で「Ａ―○番で発見」というのを地図で確認し、道路ルートなどを決めて、待機している班に出動をお願いする。５人一組で軽トラ１台、担架、スコップ、毛布２枚を持参し現場へ向かう。遺体発見場所から、消防団が出して担架に乗せて搬送するが、遺体発見場所はわかりづらく、水の中で発見した方は、胴長と船を持ってきたが重くて船の上に乗せられず、水の上を引きずりながら道路まで運んだ。

遺体回収のとき、担架に乗せた所で手を合わせ、黙祷してから運んだ。安置所に運ぶまでが消防団の仕事で、警察官が確認、検視し、消防団と本部が発見場所と時間を記録・報告し、発見順に番号をつけた。「老人憩いの家」に搬送したあと、当日中に相馬へ移す。一日10体の時もあった。ほとんど毎日遺体搬送の繰り返しだが、何十名単位で団員は来てくれた。４月後半からはほとんど遺体はあがっていない。

早く家族に戻してあげられたので、捜索・遺体搬送はやってよかった。５月８日の時点で死者92人、行方不明者23人だったのが、現在は死者115人であり、新地は身元確認が早くできたと思う。

金庫、財布、アルバムなど漂流物の回収もした。自衛隊も最初はやらないつもりだったが、やらざるを得ないとやってくれた。ボランティアはたくさん来たが、かなり後になってから、瓦礫の撤去などを行った。

泥棒が多く発生しているので、昼に捜索活動をし、震災当初から毎晩自分の地区の防犯パトロールをした。ランプをつけて巡回していると、いかにも怪しい人がいた。消防団では捕まえられないので、車のナンバーを控えた。軽トラックで行ってガソリンを抜くなどのガソリン泥棒もいた。７月10日に、被災した住宅や民家への連続不審火があった。会社に戻ったのは１～２週間後で、会社の社長も消防団に入っていたので理解はあった。

想定外の事態への団員の全面協力

消防団では、宮城県沖地震に備えて10月に総合防災訓練を行い、津波を想定した高台への避難訓練も入っていた。図上訓練DIGも、平成23年１月に行政区長を集めて、各部落ごとに避難場所や避難経路などを書き込み、地図を作ったのがかなり役に立ったと思うが、今回の津波は想定外だった。平成22年のチリ地震津波が小さかったので、今回もそんなに大きくないだろうと、逃げるのが遅れた。防波堤で様子を見ていた人や、一回避難したのに戻った人が被害にあった。今後は避難所を高台に作らざるをえないと思い知らされた。

一番心配したのは放射能だった。団員が法被とマスクだけで毎日捜索に行くのは、本当につらくて、何度も「行くな」と言いたかった。どこの人かわからないが、防護服を着ていた人はいた。防護服は軽いナイロン系のもので、私も着て活動してみたが、かなり蒸れる。雨の時は合羽を着た。濡れるのは怖いので合羽だけは着用させ、普段も下だけ合羽ズボンをはいた。

団員は全面的に協力してくれた。２か月も経つと、遺体は腐敗して臭いがきつく、地面についている所がただれていた。団員には苦労かけたが、団員は嫌だとも弱音を吐く人もいなかった。皆で協力して頑張ろうとやりきれた。こんな事態にさせて、本当、「津波のばかやろう」ですよね。

消防団と共に“頑張っぺ　福島”

福島県新地町消防団
第２分団　第５部　分団長　**小野　茂夫**（44歳）
消防団歴　20年（製造業）

夢ではなかった現実の大津波

鉄工所の営業から車で帰る途中、宮城県亘理町で揺れを感じ、ただごとではないと思った。女房から「津波６ｍ来る」とメールが入り、それを見て「やばい。すぐ戻らなければ」と思って国道６号を南下した。山元町の消防団に「国道６号より上に上がれ」と呼びかけられ、ここまで津波が来るのかと思いつつ止まった時、車のテレビで仙台空港が津波にのまれていく映像シーンを見た。国道６号から山に登ると小高い丘に人が集まっており、皆が海の方を見ている。私も一緒に見ると、ＪＲ坂元駅が津波にのまれる状況が見え、夢かなと思った。坂元でこれなんだから、新地ももう…と思って必死で帰ってきた。

子どもから「尚英中学校に皆無事避難しているから来て」とメールが入り、車に積んである消防法被とヘルメットをかぶり、尚英中学校に向かった。尚英中学校は避難所になっていて、ものすごい人数だった。家族の無事と避難状況を確認してから役場に行った。一帯が停電していた。

役場で、消防団長に状況を「すごい」としか伝えられなかった。直後は災害対策本部が機能していなかったので、避難所で暖と照明をとる段取りをしようと、副団長と各自トラックで中学校に発電機、投光器、ラジオなどを運び、役場にもう１度戻った。

その頃から行方不明者がものすごいぞと思った。役場に来ていた中島部落の救助要請で、21時頃、合計２時間くらいかけて救助した。震災当日はその作業が最後で、明るくなるのを待つという状況だったが、行方不明者を捜してくれと町民の方が心を乱して、役場にかけつけていた。手をつないで逃げた妻が、途中で手が離れてしまい、助かった夫が「何とかしてくれ！」と叫び、騒いでいた。けれど、暗いので消防団としては捜索できない。何もできなくて辛かった。車の中で夜を明かしたが、尚英中学校と役場を往復するだけで寝る余裕がなかった。どっちもパニックだった。

３月12日：捜索開始

２日目、明るくなって地震・津波の被害の全容がわかってきた。「何んだこれは？」涙すら出ない体験したことのない心境だった。夢じゃないかと思ったが、現実だった。

朝７時前に集合し、団長からの泣き崩れる訓示が印象的だった。分団ごとの捜索エリアを決め、分かれて捜索したが、捜索に入ってからが辛かった。第２分団は役場の前の道路を下りて、中島部落を中心に回るとすぐに遺体を発見した。普段の生活では、人が亡くなった姿は柩の中や病院のベッドの上でしか見たことがない。変わり果てたというか、すごく痛んでいてむごかった。身につけ

ているものがはだけて全裸に近い遺体だった。初日は４人の遺体発見した。発見された遺体には毛布にくるみ、リヤカーで遺体安置所まで搬送した。

一番印象的だったのが、同じ団員の妹を発見した時のことだ。釣師部落の団員が、妹の遺体を田んぼの中で発見して、抱きかかえて「何で逃げてくれなかったんだ～」と大声で叫びながら泣き崩れ、その姿を見る周りの団員も皆、号泣した。「ありがとうございました。見つけてくれて」と、水と泥の田に土下座して皆に謝る。何が悪いのか、どこにもあたりようのない悔しさ、悲しすぎるというか、「辛い」という言葉に尽きる。

朝、消防団控え室を１階角に設けたが、夜になって２階の町長室隣の応接室に移動し、遺体捜索・搬送の方向性、指示をそこで出した。夜解散になって、尚英中学校と行ったり来たりし、階段を上るのもできなくなるぐらい疲れ果てた。１日目は車で往復したが、２日目から原発のことがあって、ガソリンが使えなくなり、歩いて往復した。幹部や私も丸２日寝ておらず、次の日の捜索の時は身体がきつくなった。

３月13日：重機と自衛隊が入った

12日からの目視による捜索で軽い瓦礫はよけたが、重機がないと無理だと３日目にわかり、団長と相談した。つかむタイプの重機が地元にはなかった。自衛隊が入ってくれ、この悲惨な現実をどうしたら良いかと思っていたが、この人たちと一緒にやれば何とかなるかも知れないと心強く思った。次に重機も入って、瓦礫を取り除いて捜索できるようになった。水が残っている田んぼの中にやっと入れ、車に「確認済み」とビニールテープで印をつけた。車の中からも１人の遺体を発見した。余震がひどく、津波襲来の誤報が出た時も、線路から走って逃げた。捜索時にも線路から下には絶対下りるなと団長から指示があった。

自衛隊が本格的に入った４日目からは、消防団は、幹部が災害対策本部に残り、それ以外の団員が、自衛隊が発見して連絡が来ると、担架に遺体を乗せて、軽トラックで遺体安置所に運ぶところを担当した。警察は遺体捜索の人手がなく、なんで警察がやらないんだとは思わなかった。辛いが違和感はなく、消防団がやらねば何のための消防団だと思った。団員には、「被災している人の家族のことを思って捜索にあたるべ」と意思統一したつもりで、辛いけど頑張ってくれと言った。そう思ってやらないとやれないと思ったし、「自分が被災地にいながら、本当に辛い思いをしている人たちに手を差し伸べられる立場にいることに感謝しろ！」と、精神面で言わしてもらった。

ＪＲ新地駅に停車中の電車が大津波にのみ込まれた

消防団は、遺体の確認も依頼された。安置所で確認するが、遺体の損傷がひどかった人などの記憶がたくさん残っている。行方不明者の名簿と照合し、警察官と連携して、身内の方に連絡するところまでやった。それが地元でやっている消防団の強みでもある。遺族がいち早く遺体と対面できるという点で良かったと思う。でも、自分の知っている人の遺体を見るのも辛い。途中で１人、具合が悪くなった団員が出て、これ以上は協力してもらえないと思った。１か月過ぎて、時間がたってくると臭いがひどくて団員も辛くなってきた。

また、途中から不審車両が目立ってきて、警備しながら回った。不審車両のナンバーと車両の特徴をメモして警察に報告した。貴重品は中を見ず、拾った場所を書き留めて警察に届ける。前半は貴重品が多く、金庫の数は多くて重かったが、遺体よりはましだった。

消防団の参集状況

仕事で新地町以外に出ていて、当日は第２分団の団員120名中10名くらいしか集まれなかった。消防団としての意識はあるが、ここに来る余裕がなかった。携帯電話がつながらず、翌日何時集合という連絡も行き届かなかった。翌朝は100名ほどに、さらに３日目がピークで、震災当時は仕事にならないので最初の１週間はほとんどの団員が来てくれた。

最後の方は自衛隊がかなり入り、団員も次第に仕事が始まってきたので、当番制にした。毎朝６名１班で班を作って班長を決めて、自衛隊から連絡が入ると行ってもらった。２週間ほど水がなかなか引かず、湖のようになり、あぜ道が見える程度で、所々に車や家が見えていた。水が引いてから捜索が本格化してきた。

現場に出たかったが、幹部は残れと言われ、本部に２週間ほど詰めた。捜索中も鉄工所の仕事の電話が入ったが、皆に出てくれと言いながら自分の仕事に行きづらく、どちらかというと消防を優先した。仕事を本格的に再開したのは、消防団の捜索が打切りになった５月の連休明けからだった。社長は私の父親で、第２分団の幹部だったので消防団活動（使命感）は理解してくれているし、従業員である義兄も副分団長をやっている。鉄工所としての仕事はあるが、仕事の切り回しは難しく、今後はどうなるかわからない。

壊滅状態の新地漁港

私は50㎞ぐらいだから立場的に逃げられないと家族に言ったが、あの頃の不安感は大きかった。

部落の部長、班長も逃げ、４、５日目は精神的には最悪だった。連続して爆発していた頃は、家族の間でも協議になり、いなくなるとぎくしゃくした。みな事後報告だったので、不安が高まった。油が手に入らなくて逃げられなかった人、避難先がなくて逃げられなかった人がいた。会社では溶接機や車のガソリンはすべて盗まれた。「神に祈るしかない」と思った。放射能の影響は団員にもこれから出てくるかと思う。放射能被害も視野に入れて、活動をかえていかないといけない。

今はこの辺の人は線量計持っていてあまり心配していないが、これだけダメージを受けたうえ、「福島県」というだけで風評被害。これから頑張ろうというのに食べ物は売れず、漁業はひどく、ダブルパンチだ。廃業や解雇という話ばかりで福島県は取り残されるかもしれない。子どもが小さいと仕方ないが、完全に住所移転した人もいる。

放射能の影響と消防団活動

延べで２回２時間程度だが、雨が降ると団長の指示で捜索打ち切りにした。線量計もなく、いろいろな情報がメールで交錯し、俺も怖かった。防護服を着たといって大きく防げるわけではない。放射能対策として欲しいものなどまで考えが回らず、いっぱいいっぱいだった。幸い風向きが良かったが、一時新地町にいる団員も逃げて減った。

地震、津波にどう備えるか

去年津波警報が出た時や震災２日前の３月９日に広報したが、地元の人たちは、避難を呼びかけても、聞く耳持たないって感じだった。広報しながらも、津波ってどんなもんだべと思っていたが、今回大きな津波を経験して、津波は馬鹿にしちゃ絶対いけないぞと思うようになった。１番は町民の意識しかないと思う。津波に対して危険な

地区に住んでいる人は意識していかないといけない。いくら消防団が頑張っても、いつ地震がくるか誰にもわからないし、自分の生活や仕事があり、消防団員は常にいるわけではない。

消防団は人を助けるといっても、自分が死んではダメだと思う。私は、新地にいたら避難広報をして、やばかったかなと思う。自ら海側の危険な所に行って広報するなんて無茶だ。しっかりした防災行政無線とか、断線しても飛ばせるような広報システムで、沿岸部には即「避難しろ！」とすることだ。

津波ハザードマップは、改めて見ると実際の浸水地と比べものにならない。ハザードマップは大切だが、基準やデータだけではわからないところがあるから、身体ひとつでとりあえず高台に逃げろというのが本当のところだと思う。高台を作り、食糧や水などのシェルターなどをそれぞれの地区に作って備蓄しておくこと。いろいろな人の意見を聞いて、最大公約数で１人でも多くの人が助かるような広報システムや演習の仕方を考えていかないといけない。自分で選択できない紙一重の運命は避けられないが、どこで地震にあっても、その場その場でいろいろなマニュアルがあると思う。

復興にかける“アイラブ新地サークル”

“アイラブ新地サークル”は、新地町の若者が作った地域のイベントやボランティア活動を通じて魅力ある新地町にしようというサークルで、平成22年の11月に発足したが、震災を予測していたわけではない。ほとんどが団員で19歳から40歳代までが参加し、私が代表を務め、同じ団員の草刈君に副代表をやってもらっている。現在会員数は42人。使命は消防団と一緒で、“町に生きる人をいかに守るか”で、生きるきっかけのひとつになればと思って作った。海辺の人は家族も家も仕事もなくし、生きる希望をなくしている人がたくさんいる。支える方法はいろいろあるので、それを

津波により見る影もない新地町大浜地区

考えていこうと。うたい文句は、10年後の未来を目指して頑張ろう。昨日も、新地町商工会青年部主催の「なんだかんだ言ったってやるしかねえべ祭り」と題した復興大音楽祭に協力して開催した復興イベントに、5,000人集まった。

瓦礫は片付けたが、景観を悪くしたくないので、秋に津波で作付けできない田畑の草刈りをしようと思っている。震災が起きたからこそ、自分たちの立ち位置がわかる。消防団員のメンバーにも共通しているのは、消防団活動に熱い人は町づくりにも熱く、人を思う気持ちがある。第３分団班長、草刈君はとても熱く、高校生と若者を２人助け、避難所で「あの髭のおっちゃんに助けられた」と感謝されたことが心に響いて自信につながり、彼の消防精神をさらに強くしたように思う。娘を自動車学校で亡くした団員がそれでも捜索活動に参加してくれた。そういう人がいるから、被災地に住んでいるけど頑張らなきゃいけないと思える。

もっと考えていければ、町の復興に一歩でも近づけると思う。俺達が頑張らないといけない。“頑張っぺ　福島”だ。